

「あらゆる力をもって強くされ」

コロサイ 1 : 11

堀田修一 25・2・2

I 「神の栄光の支配により、あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように」：11。9節で基盤として真の霊的な知識が説かれ、10節では主イエスの御足の跡を踏み従っていく歩みが勧められた。しかし、そのような歩みの前に立たせられる時、重くのしかかってくるものは、ただ自己の無力感ではなからうか。この11節は、この点に光を当てようとする。パウロはここで、コロサイの兄弟姉妹（「あなたがた」教会）が強くされるように祈る。私達も弱く無力な者である。しかし失望する必要はない。私達自身が自分の弱さを認めて主により頼み祈る時、主は私達を強めてくださる。

II 「神の栄光の支配（原語：力、威力、強さ、権力、支配権）により（原語：に従って、よって、準じて、一致して）。あらゆる力があくまで神ご自身から発し、私達に神の贈り物として与えられる。

III 「あらゆる力をもって強くされ」→みことば、内住の聖霊、礼拝、交わり、祈り、弱さを通して与えられる神の力。「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」（使徒2：42）。

1. みことば「神のことばは生きていて、力があり」（ヘブル4：12）。私達は毎朝のみことば、礼拝のみことば、時あるごとに開くみことばによって強くされる。
2. 内住の聖霊「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます」（使徒1：8）。内住の聖霊によって私達は強くされる。「御霊も同じようにして、弱い私達を助けてくださいます」（ローマ8：26）。
3. 礼拝「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」（詩22：3）。私達自身が、神の恵みに感謝し心から神を賛美する礼拝、聖餐式の中に住まわれる（臨在される）神に触れ私達は強められる。
4. 交わり（原語：コイノーニア、交わり、密接な結合（関係）、協力する心、分け与える心、共有、分け前に与ること、参与、参加、共同所有、享受）。神が与えて下さる主にある交わり、親しい関係を通して強められる。主にあって互いに協力する交わり、主からいただいたものを分け与える交わり、主の恵みと自分たちの心の重荷、痛みを心を開いて分かち合い共有する交わり、主が集めてくださる集まりに参与、参加する交わりを通して強められる。主ご自身と主が集められたお互いを必要とする教会（共同体、キリストの体）。証し：主を間に置く交わりの恵み。「あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたい」（ローマ1：12）。「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい」

い」(ガラテヤ6：2)。「互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい」(Ⅰテサロニケ5：11)。「神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4：32)。

5. 祈り。神との深い交わり。心を開き、隠さず正直に打ち明ける交わり。心が強められる。「どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である」(詩篇62：8)。また、ともに祈る集まりの中におられる主によって強められる。「あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(マタ18：19, 20)。主が言われた祈りの大切な条件とは？
→「心をつにして」。そのためには、

- i 祈る対象である偉大で素晴らしい神を信じる信仰の心をつにして。
- ii 互いに心を開く。心に憎しみ、恨みがあるなら心をつにして祈ることは出来ない。赦さない心、憎しみを隠し持っているなら、心のこもらない、偽善的な表面的な祈りとなる。心をつにするためには、心をつ打ち明けて愛をいただいて真実を語り合う行程、プロセスが必要。神からの愛、赦して互いに赦し合い、和解することをあきらめずに目指して祈る。「祈っているとき、だれかに対して恨み事があつたら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪(誰かを恨む罪)を赦してください(神との親しい交わりの回復)」(マルコ11：25)。
- iii お互いのこと、課題、本当の心の重荷を理解し合う。互いに交わり真実を語り(「あなたがたは偽りを捨てて、おのおの…真実を語りなさい。私たちはからだの一部として互いにそれぞれのものである」(エペ4：25)、愛をもって聞き合う。「聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい」(ヤコブ1：19)。語る前に、よく聞く事が必須。お互い理解し合おうとする心があるとき、隔ての壁を打ち壊される主は、心をつにすることを実現させてくださる。エペ2：14。

6. 弱さ。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」Ⅱコリント12：9。何という恵み！世の価値観では、私たちは、弱さを通して強められる。大切なことは、自分の弱さを正直に認めて、心から主に拠り頼むこと。主は、個人的にも、そして主が備えられた聖徒を通して強められる。私たちには、信頼できる交わりの中では自分の弱さを正直に出して祈り合い支え合う恵みがある。パウロは

- ①主に対して、正直に弱さを打ち明け、祈りました。Ⅱコリント12：9。
- ②目に見える聖徒たちに自分の弱さを打ち明け、彼らを通して慰められた。「だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょくか」Ⅱコリント11：29。「私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。ただテトスが来たことばかりではなく、彼があなたがたから受けた慰めによつても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました」Ⅱコリント7：5～7。

Ⅳ 神の力により強くされ→「どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように」：11。1. 神からの忍耐は、非常に大切。忍耐（原語：逃げ出さずにとどまる）は、先走りせず、性急な結論を出さず、神の時を待ち、神が働かれる時間を神に差し上げる。忍耐は、人生をあきらめず、最善をなさる神を信頼し神の時に前進。2. 神が下さる寛容（原語：気が長い、根気良く待つ、寛大、辛抱強い、長く苦しむ）。神は私たちが長く苦しむ時に見捨てず、共に苦しみ寄り添ってくださる。その神の寛容を私たちがいただくときに、長く苦しみの中にある人に寄り添う人に変えられる。神から寛容を頂く人は、相手の人格を責め続ける人ではなく、相手の過ちを愛を持って正しながら、人格、尊厳を尊び、解決のために対話をしていく。※アウシュビッツでの迫害を受けた90代の方の言葉「何時の時代も、対話と寛容」が必要です。現代は米国、アジア、ヨーロッパの国々は、対話、寛容ではなく、独裁的、対話ではなく分断を生む傾向の政治。神を知る私たちは地の塩、世の光として、神に祈り「どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように」。応答の賛美418「いつも私を支え」を賛美しつつ、忍耐と寛容を祈り求めましょう！